

## 編集後記

第67巻第1号をお届けします。2020年の年初より世界的なパンデミックとなったCOVID19の中で、東京オリンピックイヤーは延期され、アメリカの大統領選挙年も混乱のうちに終わり、2021年を迎えました。2021年に世界そして日本にも平穏な日常が戻ることを期待して、医史学雑誌を編集しております。

総会、例会など会員が顔を合わせてお話できる機会はほとんどなくなってしまったような1年でしたが、本号をお届けできることは大変にうれしいことです。

また、12月に延期して第121回総会・学術大会をWEB開催していただいた、弦間昭彦会長、志村俊郎実行委員長はじめ実行委員の皆様には深く感謝いたします。講演と第66巻第2号(総会号)のプログラム演題の多くをスライドで拝見させていただけたことは、いままでの会場が分かれる総会ではできなかったことでした。口演を聴き、少ない時間であっても質疑応答ができる学術大会の意味を再確認できる機会でもありました。総会発表だけでなく、本雑誌へ投稿していただきたい演題が多かったと思います。また本雑誌には『広場』『資料紹介』『消息等』もあり、会員の交流の場が雑誌上にあることもお知らせしておきたいと思います。ぜひご投稿をお願いします。また例会については前号後記で松村委員から報告されているように、事務局をハブにZoomを用いたオンラインの開催が実行されており、WEBでの参加ができるようになっておりますので、どうぞ参加ください。状況の日々変化する中での開催にご理解ください。

COVID19のパンデミックの第1波のころから準備されたと考えられる、医学と感染症の歴史についての、人文科学や社会科学領域の出版が日本も含めて世界中で活発であります。

医学の臨床や基礎に携わる方々の仕事は出版を待てないような形で発出されております。公衆衛生や疫学が、臨床医学の現場での喫急の問題となり、歴史学を語ってはいられない感覚もあります。しかしPCRという検査により感染者とされた数が行政とメディアの基礎的データとして独歩しておりますが、感染と発症は異なること、しかし媒介者がヒトであることのおおきな問題は医学史を学んできたものは知っており、緊急的に開発されたワクチンに期待するとともに、多くの意味での懸念もまた有するものであります。

本雑誌の編集委員の立場に戻ると、現在の会員の皆さんがそれぞれの職務、研究に多くの困難を伴い、雑誌論文の投稿も容易ではないかと推察されます。本雑誌の論文査読を複数にしたら、査読意見が大きく割れる論文も多くなりました。しかし、それぞれの査読者が短時間の中で行われた査読を尊重していただき、はやめに修正稿をお出しただけことが学会の活性化には必要なことと考えます。本号には4篇の全く領域の異なる医史学の論文を掲載できたことを感謝いたします。

(渡部 幹夫)